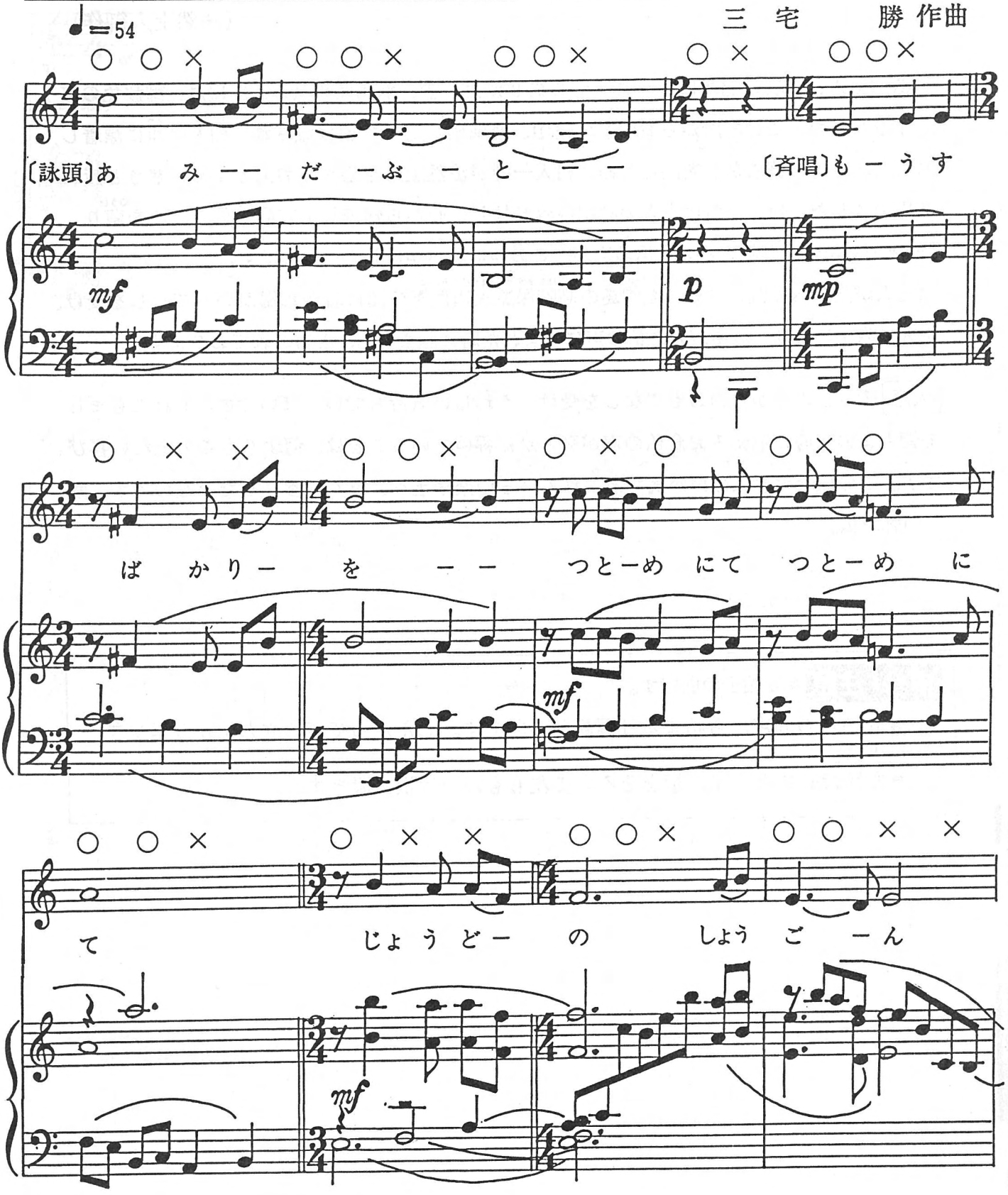
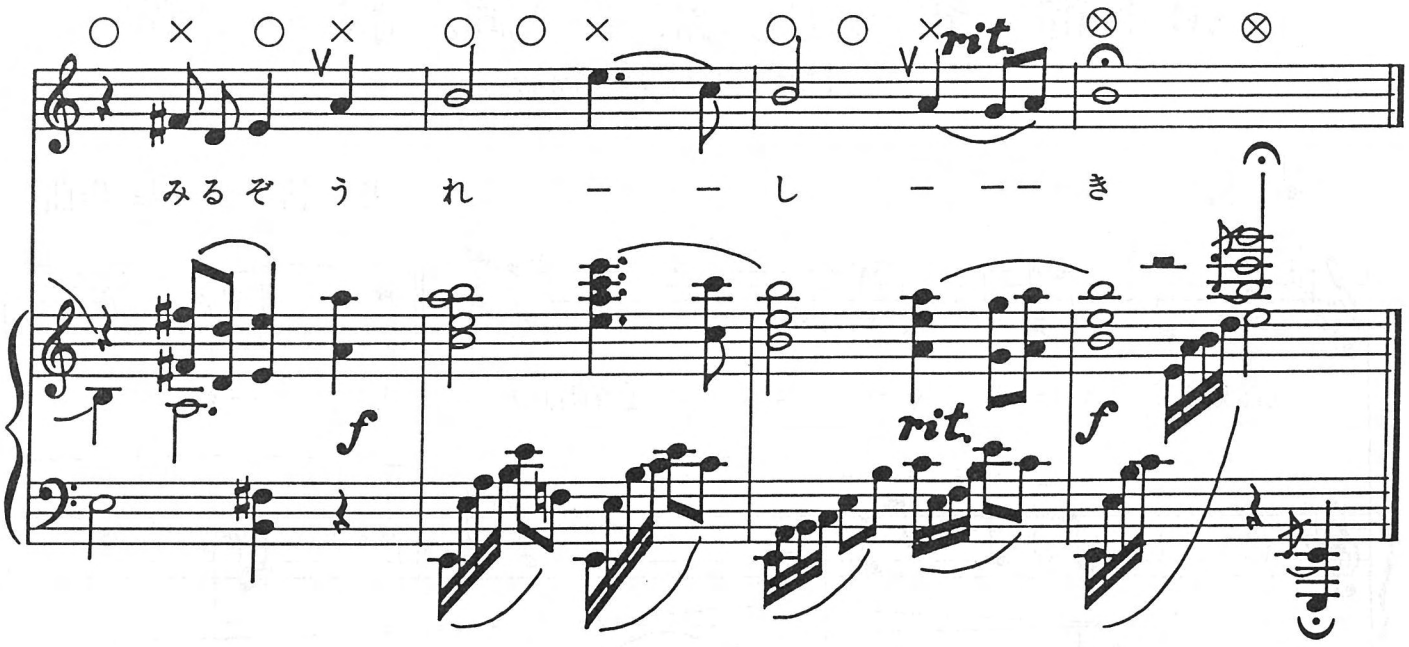
第九番　当麻　奥の院の御詠歌（見浄調）
（往生院の御詠歌）

ポイント注意

- 半拍休止から立ち上がる声はかるくアクセントをつける。
- 「みるぞ」の「みる」はソフトに、「ぞ」で力強く。



第九番　大和の国　当麻　奥の院

阿弥陀仏と　申すばかりを つとめにて　浄土の荘厳（しょうごん）　見るぞうれしき
（法然上人御作）

当麻寺の本堂は曼陀羅堂（まんだらどう）と言い、中将姫の「当麻曼陀羅（たいままんだら）」が安置されています。この本堂の後方に奥の院があります。この奥の院は当初、往生院と呼ばれていました。南北朝時代、応安３年（1370）に知恩院第十二世誓阿上人が勅許を得て、動乱の京都より法然上人御影像や法然上人行状絵図（ほうねんしょうにんぎょうじょうえず）（勅修御伝）など知恩院に収まっていた貴重な宝物をこのお寺に移されました。当麻寺の奥の院ではなく、知恩院の奥の院として開創されたのです。ある時、誓阿上人が夢で法然上人御影像の額に釘が打たれたと告げられ、驚いて目を覚まし釘を抜いたところ、血が流れ出ました。この霊験を聞いて世の人は「血垂れの御影」と称して奉ったと記されています。

歌意　『九巻伝』には「三昧発得（さんまいほっとく）の御歌には」とあり、法然上人も三昧発得の人であられたことを示しています。このことは上人御身の一大事でありますから、「われはただほとけにいつか」と願われたお歌と照らしてみれば、歓喜のお心のほども知ることができましょう。

大意　毎日お念仏を六万遍七万遍とひたすら励んでいますと、おのずから心が静かになり、目（ま）のあたりに阿弥陀さまやお浄土のありさまを拝むことができます。身も心も喜びにひたることができますのは、本当にありがたいことです。